山の鳥

岩波写真文庫　31

山の鳥
31

樹洞でそだったヒガラのひなは頭にまだうぶ毛がある.

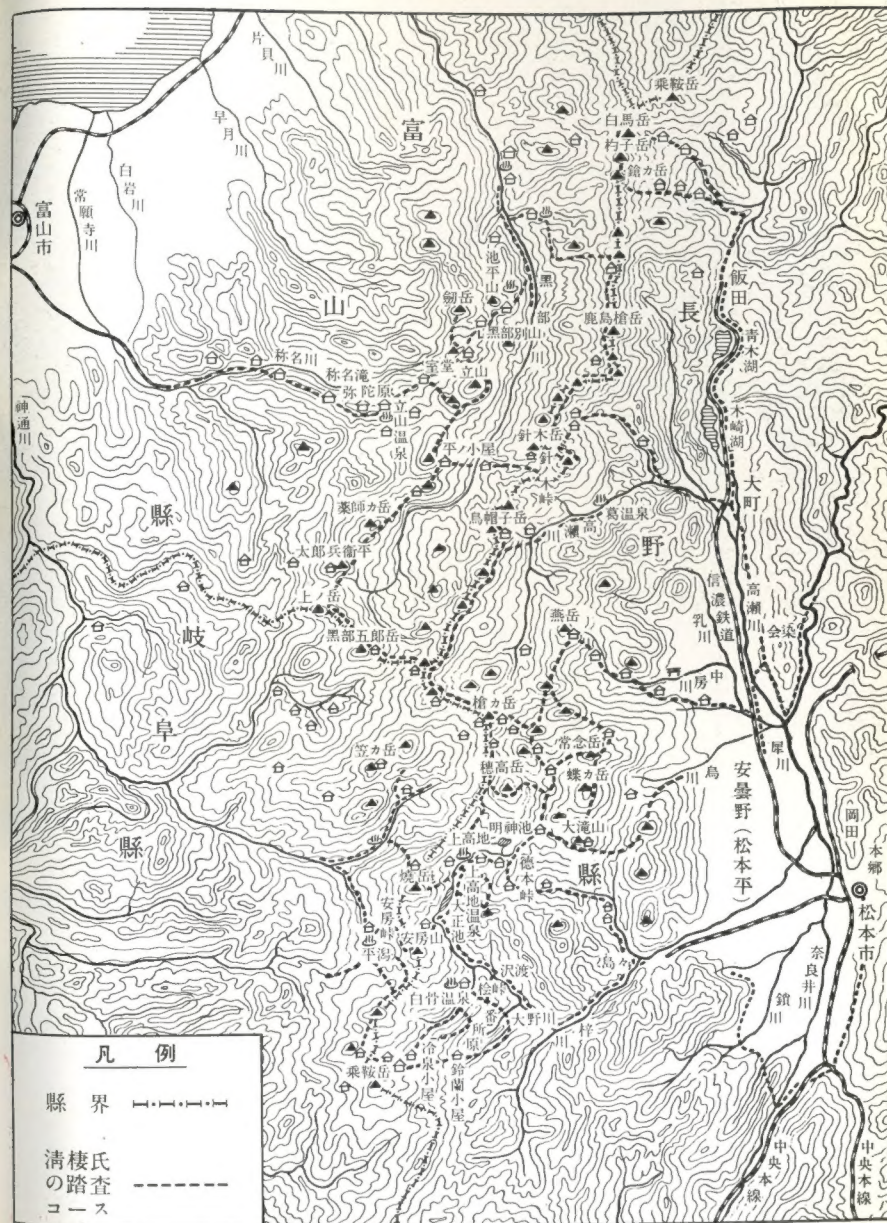
目　次

編集　岩波映画製作所
　　　岩波書店編集部
監修　清棲幸保
写眞　清棲幸保

岩波写眞文庫 31

定価 100円　1951年 3月20日　第1刷発行　1958年 4月20日 第9刷発行　発行者　岩波雄二郎　印刷者　米屋勇　印刷所　東京都港区芝浦 2/1　半七写真印刷工業株式会社　製本所　永井製本所　発行所　東京都千代田区神田一ッ橋2/3 株式会社岩波書店

凡例

縣界 I-I-I-I

清棲氏の踏査コース - - - - - - -

かりに、日本の鳥たちのなかまが、将来彼らの「近代社会史」をかくことができると仮定してみよう。そこには何よりも、明治以来の人間社会の発達、わけても大都市の膨脹や、地方の交通、産業の振興がかつての楽園を破壊し、ふるさとが荒涼とした沙漠と化してしまった「滄桑の変」が描写されるであろう。それは戦火に追われた市民たちの、流浪の旅にもまして悲惨なものであったにちがいない。が、その中に、彼らは又かくことだろう、「日本アルプス一帯を中心とする地方には、当時まだわれわれの大都会がのこっていた」と。

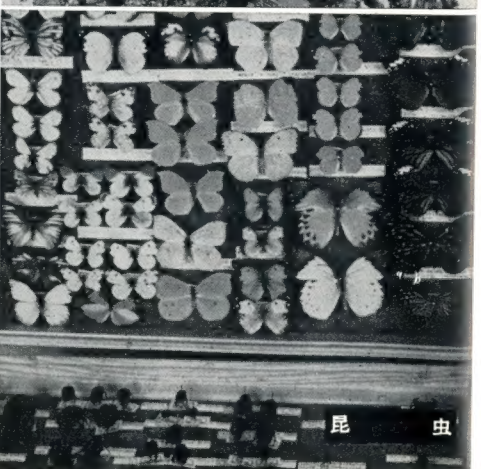
日本列島の屋根といわれる日本アルプス地方は、またわが国の鳥の宝庫でもある。春あさいこの山麓に、遠く海をこえてきた渡り鳥たちは、つかれた翼をやすめ、渓谷に、自然林に、あるいは草ぶかい村落近く、または山頂近いお花畑のあたりに、繁殖の場所をえらぶ。また、彼らの別れ去ってゆく秋ぐちには、反対に吹雪のすさぶシベリヤや千島から、多鳥たちの大群が渡ってきて、山ふところにいだかれた山麓の林や、清冽な水をたたえた湖水のほとりに春の訪れを待ってたむろする。渡りをおこなわない留鳥たちにとっても、森林にとみ、水系のゆたかなこの地方が絶好のすみかであることはいうまでもあるまい。日本地図をたんに平面的にながめただけでも、天然のままの森林、原野、湖川の豊富なこの地方は、鳥たちにとって豊富な環境を提供する。が、それだけでなく、二〇〇〇メートル以上の高山が、峰をきそうアルプス地方は、これを垂直に見るならば、気候の上ではそれぞれ温帯、亜寒帯、寒帯に相当するいくつもの階層に分かれ、そこには、彼らの住居や食物を提供する植物帯が、やはりいくつかの階層に分かれて、低山帯、亜高山帯、高山帯と、変化にとむ様相をなして彼らを待っている。したがって、この地方にすむ鳥たちは、その数において豊富なだけでなく、たとえば北海道で平地にみられるイワツバメが、ちょうど気候の上では寒帯にあたる山頂ちかくにたくさん渡ってくるし、また反対に九州では高山にいるコルリが、山麓の平地に巣をいとなむといったように、種類の分布の上でも、その生態の上でもつきない興味を与えてくれる。鳥類の研究家として名だかい清棲幸保氏は、この地方の鳥を調査すれば日本全体の鳥のようすがほぼ明らかになるであろうという点に注目して、すでに一〇年にわたり、鳥の生態を中心に研究をかさねてきた。その成果として、氏にはすでに「日本北アルプスの鳥」という著書があるが、発行部数も少なく一般にはゆきわたっていない。ここに、氏の撮影になる数多い写真のうちから、主な部分をえらんで、いままでの鳥の書物が、ともすれば分類を中心とする図鑑的なものが多かったのに対して、私たち自身鳥たちの環境にふかく入ってゆき、その生活のさまざまな様子をさぐってみるように編集したのが、この本である。

マメガキの実

タケカンバの花穂

ヤドリギの実

トウヒの実

野ウサギの子

昆　虫

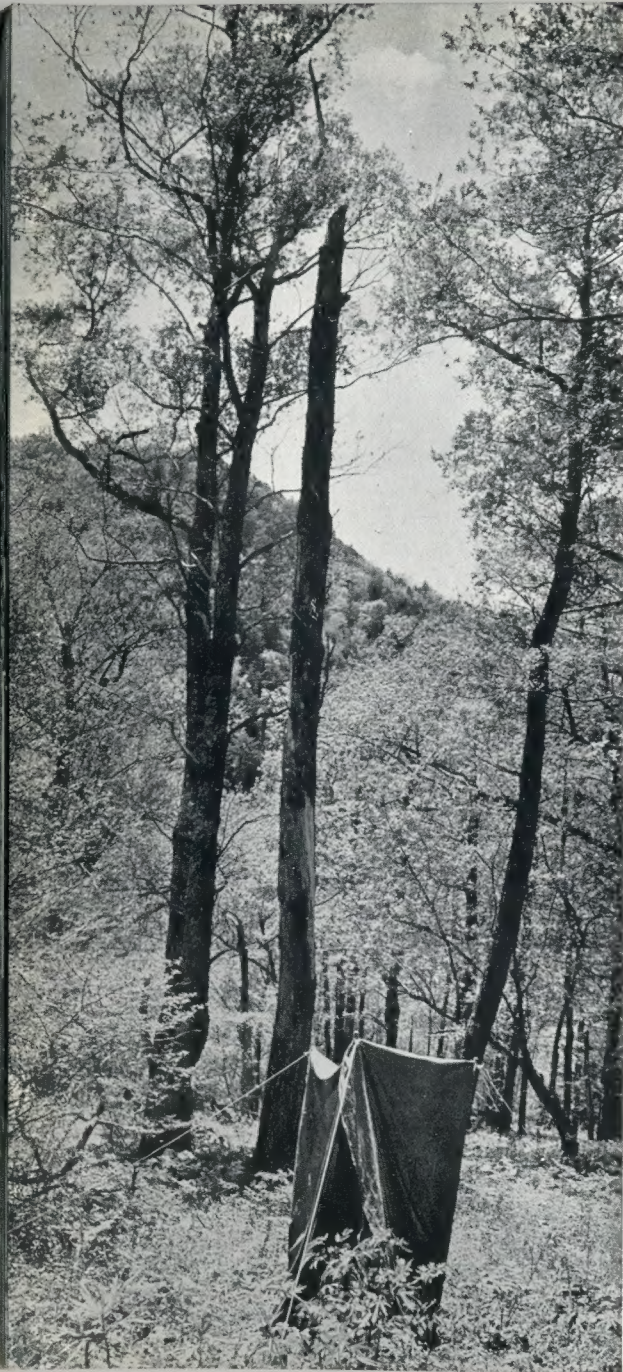
鳥の剥製をつくって種類を定めたり，飼育して生態を調べたりするのも大切だが，もっと重要なのは，野山にあるままの鳥の生態やその環境，習性，食性，数量の調査である．それにはここに見るように巣や卵の比較研究も大切だし，鳥の生活，とくに食性をめぐって関係ふかい植物や昆虫を観察し採集する努力もつまれる．

日本アルプスの鳥の食性から，興味ふかいものをひろうと，トウヒのたねはホシガラス，カケス，カラ類などの，カキの実はメジロなどの好餌．ダケカンバの花穂はライチョウの，ノウサギはタカやワシの類の餌として知られている．ヤドリギはナラやクリの木にとまる鳥のふんから移植されるもので，ほかに餌のない冬の間，レンジャクやヤマドリのごちそうになる．

乗鞍岳に鳥を追う清棲氏

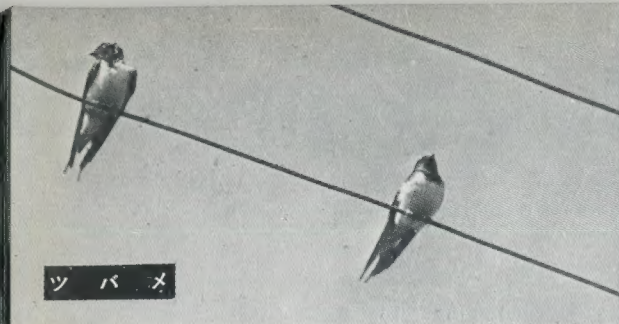
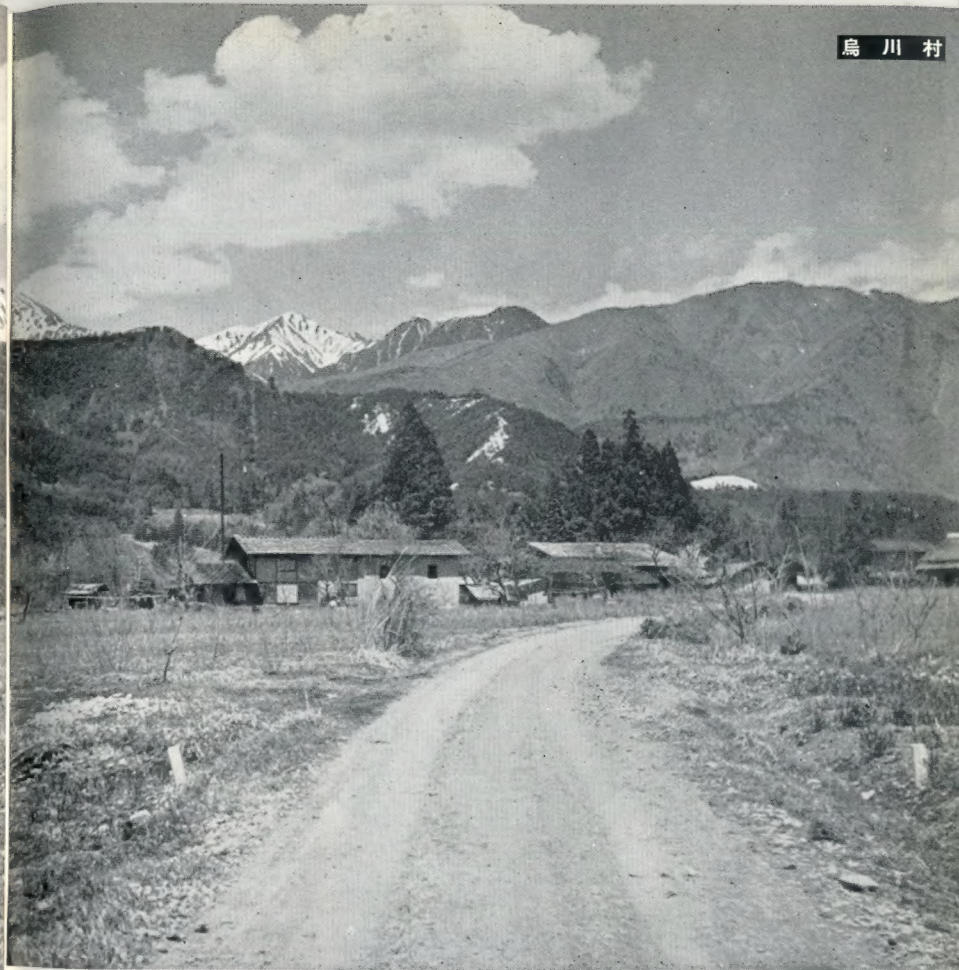
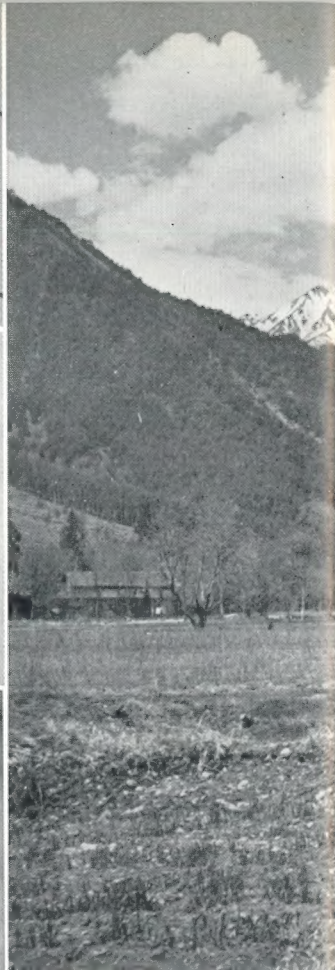
生態研究になくてならないのは写真だが，それにもたいへんな苦心がある．

撮影方法：キバシリが樹洞に巣をつくる様子を撮るために，天幕にカメラ穴をあけたブラインドをはって(この上をさらに擬装する)鳥の来るのを待ったり，タゲリやケリのような，警戒心のつよい鳥を撮るには，草むらにカメラをかくし遠くから糸でシャッターをきるというような方法もある．

写真機：三脚つきの500 m/mグランダックはかくれて鳥をまつ撮影法に用い，300 m/mテレセントリックは望遠レンズをつけて鳥に接近する撮影法に使われる．これは上高地で．野宿も楽しそうだがいつも楽なのではない．

ゴジュウカラの巣をとる

営巣，抱卵，育雛など鳥の繁殖期のいとなみは生態のうちでもとくに大切だが，鳥の中にはその点の明らかになっていないものも多い．ゴジュウカラの生態は清棲氏の苦心ではじめてはっきりした．

ここは亜高山帯の明かるい森林．地上11 mもある朽木にあるアカゲラかコゲラの古巣を拝借してゴジュウカラは巣を構えた．

深さ23 cmもある樹洞の巣の底に，赤褐色と淡紫色の斑点をちらした美しい卵を七つもうむ．おすとめすはほぼ30分交代で卵を抱き，餌をとるにはこのような垂直な幹を器用に上り下りしつつ木の割れ目をつついて虫をついばんでいる．カメラがその生態を追ってゆく．

春夏の山

山麓の鳥

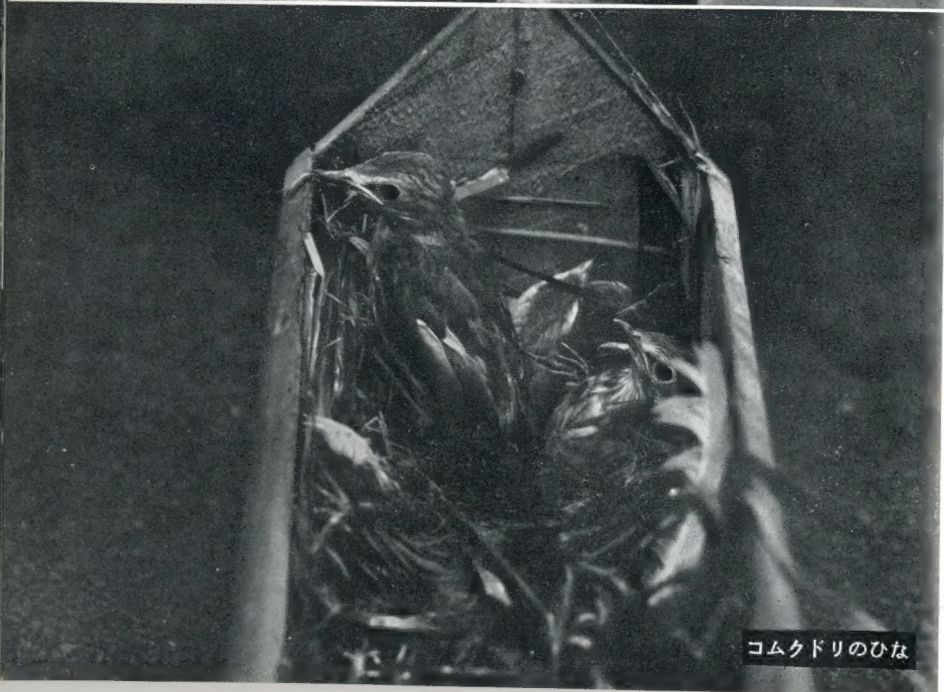
雪にとじこめられていた山麓の安曇野(あずみの)(松本平、標高平均五〇〇メートル)にも、三月に入ると春のけはいが濃くなってくる。カラス、スズメなど周年その姿をみることのできる留鳥の中にも一部は寒さをさけて暖い土地に移るものがあり、冬のさなかはしぜん鳥界もさびしいが、雪どけの下からついばむ餌が顔をだすと、これら留鳥の数もます。同時に繁殖の地をここにもとめてくる夏鳥もふえる。まず村落の附近から、鳥のすむ環境に富んだ場所をあるいてみよう。そこにはツバメ、ウグイス、メジロなど誰も知っている愛らしい姿にまじり、そろそろ高山の別荘にうつるミソサザイ、ヒガラや、さらに遠く北国に旅だつツグミ、アトリなど冬鳥の群が入りみだれてにぎわっている。

ツバメ

ハシブトガラス

ハシブトガラスのひな

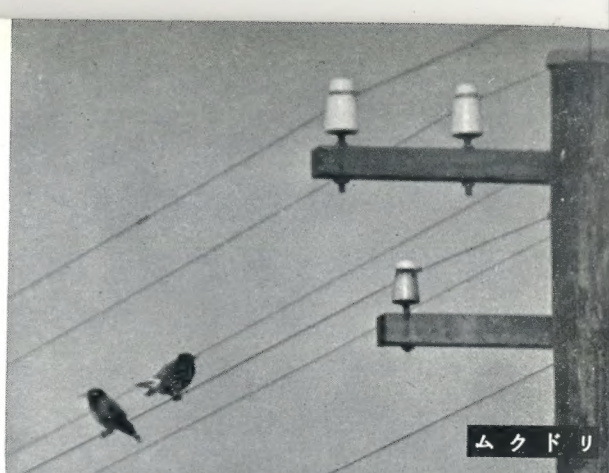
肌寒い3月末，もうツバメは山麓に現われる．大部分平地で繁殖し，山地は同類イワツバメの領分．中には1200m位の村落で繁殖した例もある．留鳥のハシブトガラスも山麓にすむがこれは1100mで生まれた山ッ子である．

サンショウクイのひな

コムクドリのひな

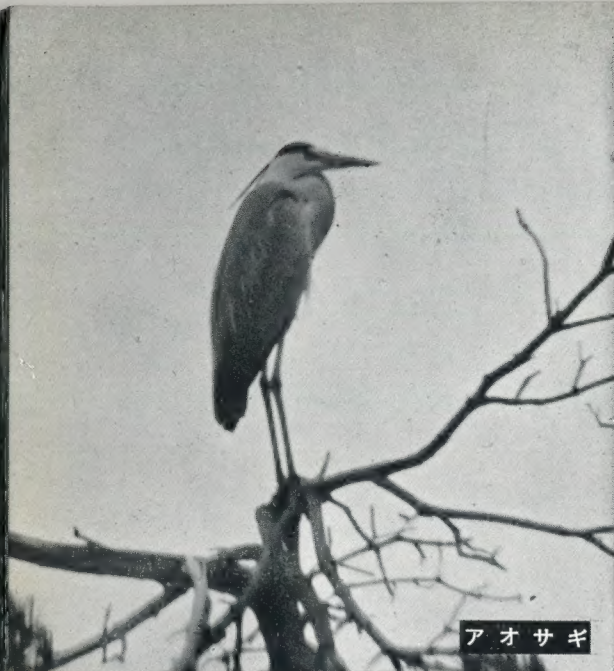
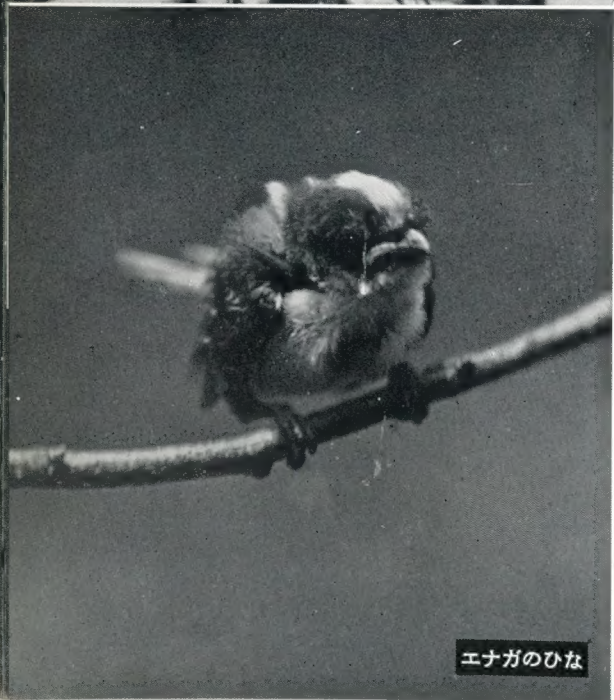
サンショウクイ

巣の中でツノトンボをくわえているひなは，サンショウクイで，コサメビタキとともに夏鳥である．どちらもおもに落葉濶葉樹の枝に巣をかける．外側にウメノキゴケをかぶせ，クモの糸でからめた巣は木のこぶと見まちがう．コサメビタキはヒタキのなかまで，飛びながら虫をとる習性があるからスリ餌では飼いにくい．

ムクドリは留鳥だが雪のあるあいだは餌が少ないので数がへる．なかまのコムクドリは4月からみられる夏鳥で，これは巣箱でそだったひなだが人家の石垣や屋根のすきまに，草や紙で巣をかける．

富山県の側だけにくるコシアカツバメは，こうして泥をついばみ，それで徳利型の巣をこねあげる．

ムクドリ

コサメビタキ

コシアカツバメ

アオサギ

トビ

トビは尾をかじにし，上手に旋回して餌をさがす．留鳥だが多少は移動する．

アオサギはふだん水辺にいるが，繁殖期には，ゴイサギもともども森林に群棲する．富山県にはそうした集団繁殖地があるが安曇野では冬鳥である．

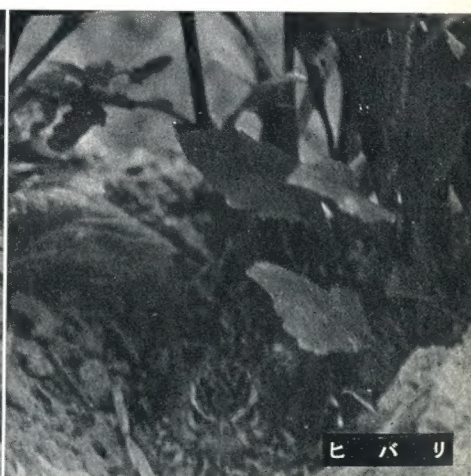
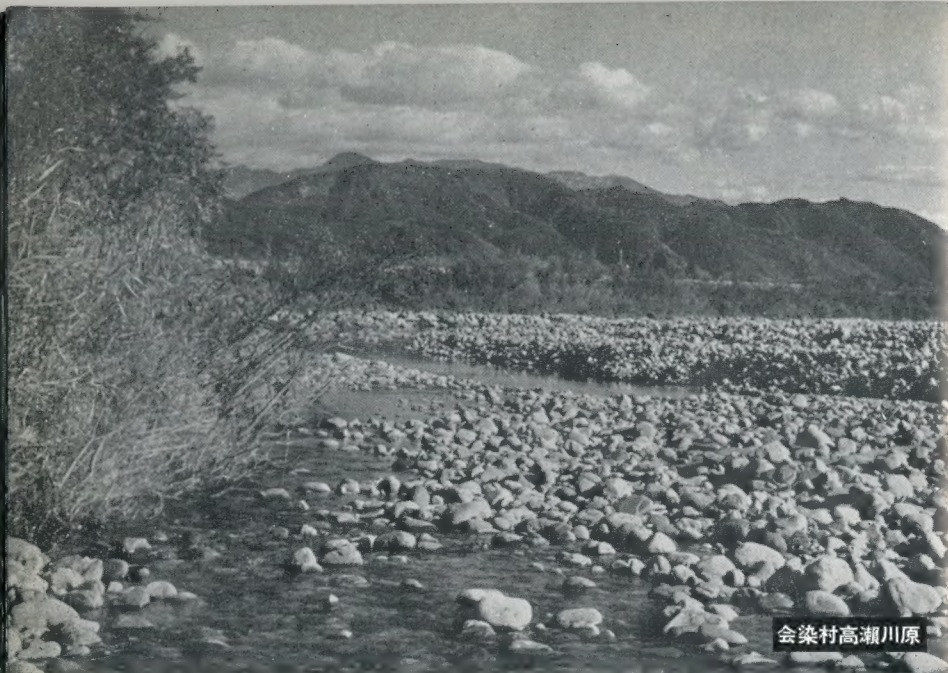
シジュウカラやヤマガラのなかまのエナガは厳寒でも上高地辺にみられる留鳥．他の鳥の羽を集めてつくる巣の外側をウメノキゴケでかためるのは前頁の二種と似ているがこの玄関は横口についている．3〜4羽で一つの巣を共有する場合もある．

ヒバリは声のうつくしい鳥．地上にいとなむ巣は外側が枯草や樹根で，内には細根の産座を設ける．

エナガのひな

岡田村

田畑のほとり　鳥の中には主として食性の上から耕地を遠くはなれてはすめないものが多く、山国の農民が、山麓の斜面まで切りひらいて作ったとぼしい田畑を、自分たちの食糧庫にし、その附近の林縁をすみかとしている。カラス、スズメ、ムクドリ、ヒバリなどから、ネズミを好餌とする猛禽のトビに至るまで、耕地のない溪谷や高原ではその数が少ない。これらの鳥にとっては、人間が新たに野山をひらいて作った田畑は彼らにも新開拓地で、長い年月のうちには植民の数もふえる。しかしごく新しい田畑にはまだ彼らのすみつかない所が多く環境の違いによる鳥の適応性の差などもしらべられる。たとえばよく林縁の草むらに巣をつくるウグイスなどは適応性のつよい鳥で夏は都会附近の草原から高山のハイマツ林にまでその姿が見られる。

ヒバリのひな

ヒバリ

会染村高瀬川原

山麓の水辺　安曇野には、やがて下流で信濃川となる犀川の支流が山々の間をぬっており、北端には青木湖や木崎湖もまっ青な水をたたえている。富士山のように鳥の数そのものは多いが、そのすみ方にかたよりのみられる環境にくらべると、この水系だけでも環境のゆたかさを示す。だが同じ水辺でも、山麓には渓流性の昆虫をこのむカワガラスなどは見られず、ミソサザイも夏は山上に避暑してしまう。そのかわり上高地辺にいないオオヨシキリやカイツブリには平地の水辺がすみやすい。カイツブリの場合、十和田湖では高い所にもいるのにこの地方では大正池などに見られず山麓にのみいるわけはわからない。またたとえばコガモ、マガモなどはもし木崎湖辺が太古のままでひらけていなければ、ここでも繁殖するだろうと推定されている。

コアジサシ

コアジサシの卵

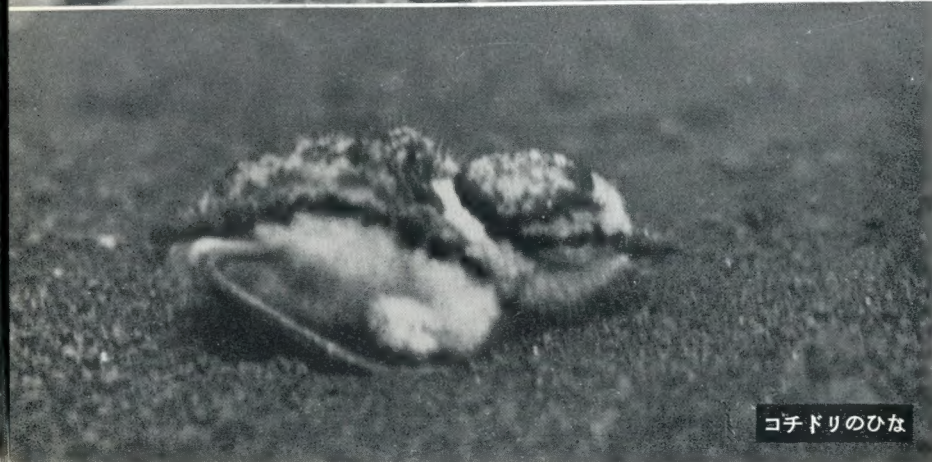
ゴイサギ

カワセミ

うまそうにドジョウを食べているカワセミは，魚の骨を自分の巣にしきつめそこを産座にして白い卵をうむ．水の上の空中の一点にとまり．羽ばたきつつ魚をねらってザンブと飛び込む姿がみられる．

サギのなかまでいちばん多いゴイサギもやはり山麓の水辺で魚をとるが，繁殖は森林でする．ヨシゴイもこのなかまだが，葦原の中に巣をつくり，抱卵中近づくとくちばしを上向にし，人の向く方向に体を廻転させるという妙な習性をもつ．

カモメの類のコアジサシは，富山県の河原にくる夏鳥．砂礫の凹みに産卵する．

ヨシゴイのひな

コ チ ド リ

コチドリのひな

セグロセキレイ

セグロセキレイは上高地や安曇野の水辺にすむが囀鳴期にはよく電線や小松の上でさえずっている.

オオヨシキリの渡ってくる5月にはまだ水辺のアシはのびていない. 待ちきれずに畑のクワに営巣するものもあるが, たいていはハンノキなどにとまってさえずりながらアシののびるのを待ち, 巣をかける. ところが, それをまた待ちかまえて卵をうみにゆくのがカッコウだ. 仮親のとそっくりな斑点の卵なので仮親は気がつかずに抱いてやる.

コチドリは安曇野の河原に多い夏鳥だが, 上高地にはいない. 河原に小石をならべたかんたんな巣をつくって卵を四つうむ.

オオヨシキリ

オオヨシキリの巣にカッコウの卵

ウグイス

ホホジロ

コヨシキリ

金染村

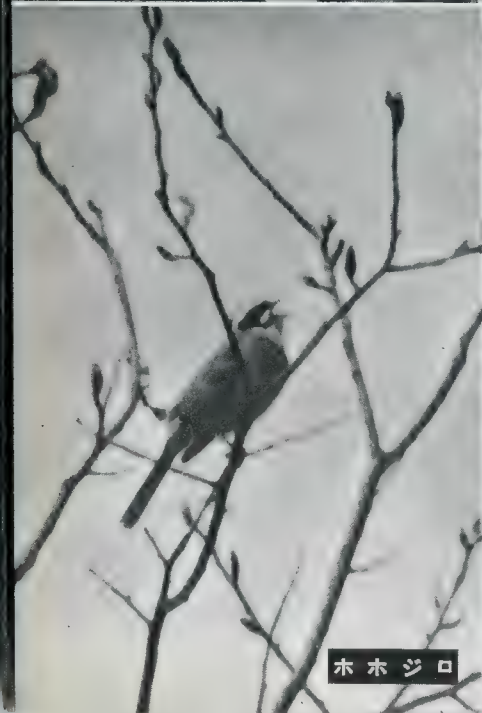
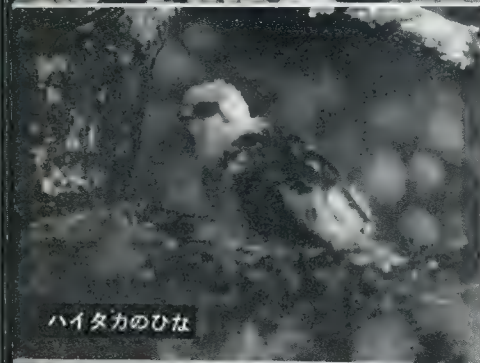
低山帯の鳥

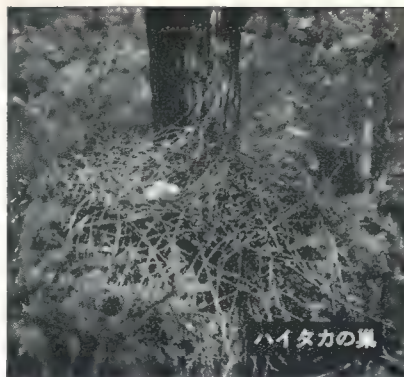
草原から林へ　植物分布の上での丘陵帯（標高五〇〇メートルまで）では純粋な天然林はひじょうにとぼしく、人工林が多いのでとくに純林（スギならスギばかりの森林）にすむ鳥の数は少ない。しかし人工林でも雑木の明かるい林やまだ植林が伸びきらず灌木林にまがうような場所には、ウグイス、ヒバリ、ホホジロなど乾燥した草原や灌木林をこのむ鳥がすみ、ウグイスの巣に卵を託して仮親とするホトトギスもウグイスに似たチョコレート色の小さい卵をうみつけようとして、その周辺を飛びまわる。夜自動車で疎林の道をゆくと、ヘッドライトの光にまっ赤なヨタカの眼がうつし出されることがある。夜行性のこの鳥が、カを食べようとして地上に下りた姿である。この鳥は巣をかけず草原にごろりと二つ卵をうむ。

抱卵するヨタカ

カッコウ

岡田村

低山帯の林　低山帯（標高五〇〇－一五〇〇メートル）に入ると、人工林にまじってブナなどの闊葉樹を主とする自然林がふえだす。ここはやがて秋となれば美しく紅葉する落葉樹が多く、シラカンバの姿もふえるが、鳥の世界では、キビタキやオオルリの声が標高五〇〇メートル前後を示す指標である。林の梢には、シジュウカラを隊長にしたカラのなかまにエナガなどがまじって、餌をあさる姿もみられるが、やがて繁殖期に入るともうこうした群棲の姿はなくなり、一つがいずつ巣をいとなみだす。繁殖前めすをよび、また繁殖地のなわばりを争うときに、鳥たちは地声よりあざやかなさえずりをする囀鳴期に入るが、それも山にかかれば変化に富み、ウグイスなど、東京の附近では春さきでないと聞かれないさえずりを、夏になっても一生懸命につづけている。

ハイタカ

ハイタカのひな

ハイタカの卵

ハイタカの巣

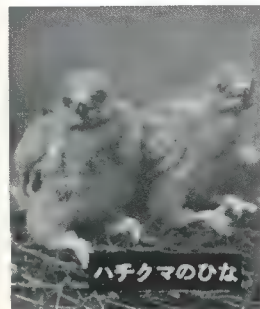
昔，大名たちが鷹狩りにつかったハイタカは，夏ははるか高山の頂から山麓にわたってすみ，冬になると大部分が低地に下ってくるが，この地方に繁殖するもののほかに秋，ツグミやアトリなど渡り鳥の群を追って，北方からやってくるものもある．ふだんも時々，小鳥を追って人里ちかく飛んでくる姿が見られる．猛禽でも，トビはネズミなどのほかに死んだ動物も食うが，ハイタカその他のワシやタカは死屍を食べない．

5～6月頃，主として針葉樹林の高い木の枝に枯枝をあつめて外径60 cmもある粗大な巣をかけ，4～5個の卵をうむワシやタカの類は，小鳥にくらべて卵のかえるのにも，かえってからの巣立ちにも日数がかかる．ハイタカの卵は35日目にかえり，それから28日ほどたってひなが巣立ちする．親はその間せっせと小鳥やネズミを巣にはこんでくるが，ひなのいるうちに人間が巣に近づこうものなら，親はたちまちキャッキャッというするどい叫び声をあげて，さかんに威嚇をこころみる．めすはおすよりも大きく，生まれたひなははじめのうちは全体に白いうぶ毛のあるのがこの種の特徴．

ノ ス リ

オオタカの卵

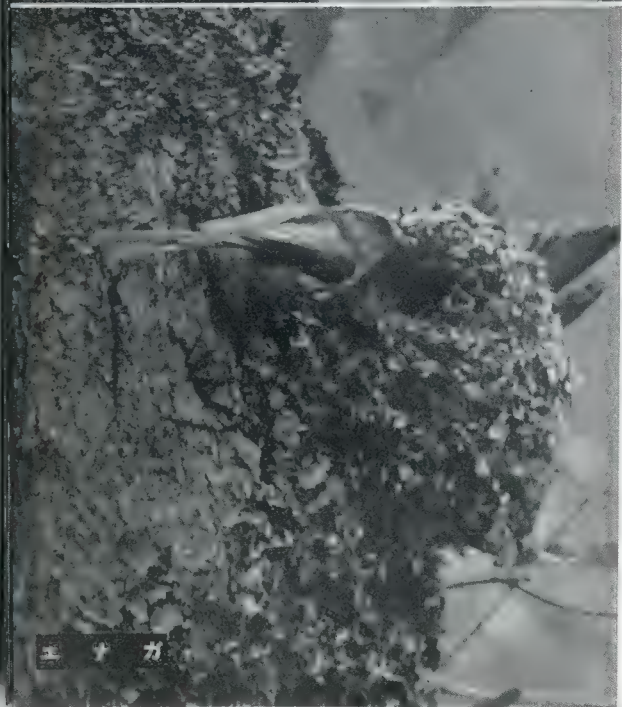
クロツグミやトラツグミも針葉樹林やそこに入りまじる濶葉樹の上に，鉢型の巣をかける．このひなはうぶ毛がすり切れ本羽のはえるところである．

オオタカはキジ，ヤマドリ，ウサギなどを食う鳥で高い木に巣をつくり卵を二つうむ．ハチクマはハチが主食で，ひなのうぶ毛はもやもやしているが親になるとかたくてすべっこい本羽になりハチもさせない．ノスリはワシのなかま．アカマツなどの林間に巣をいとなむ．

ハチクマのひな

クロツグミ

トラツグミ

トラツグミのひな

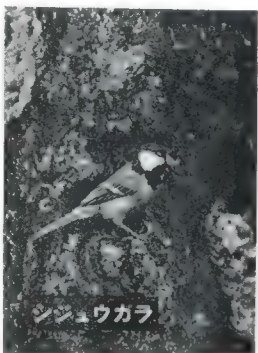
アカモズ

エナガ

アカモズ

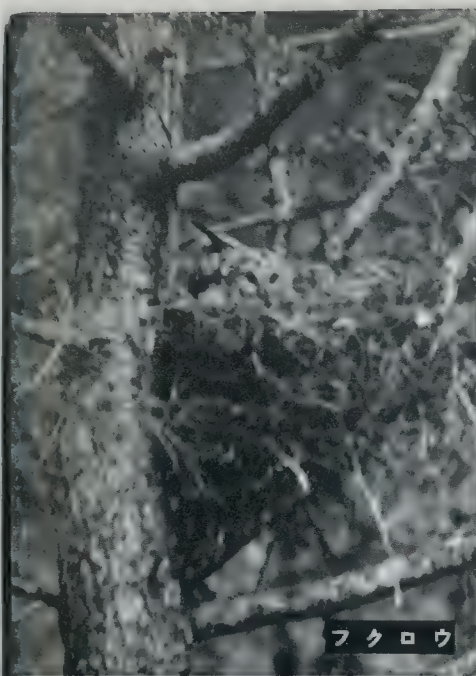
カケスは低山帯や亜高山帯にすむ留鳥だが秋には2600 m くらいまで餌をあさりにゆく．頭もよくてハイタカやネコの声をまねてなく．これはカラスのなかまで，ひなはうぶ毛がなくまる裸である．

アカモズはこの辺のモズのなかまではーばん多い．

エナガも分布のひろい鳥．

シジュウカラは巣箱をかけるとよくはいってくるが，この写真は自分の巣．

シジュウカラ

カケス

カケスのひな

フクロウ

サンコウチョウ

フクロウのひな

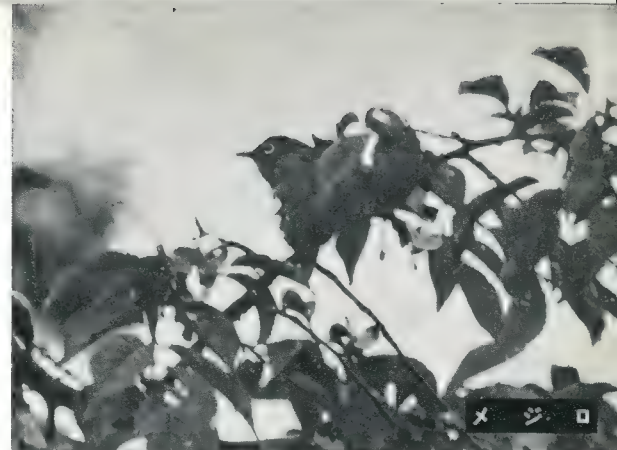
センダイムシクイ

画にもかかれる美しいルリ色のオオルリは渓谷の濶葉樹林に数多い夏鳥の代表．９月には飛び去るものが多い．その巣に卵をうもうとするジュウイチがそうさせまいとするオオルリに追われて，卵を口に逃げてゆく様子なども見られることがある．

メジロは多く低山帯の濶葉樹や灌木の林をこのみ枝に巧みな釣巣をつくる．

サンコウチョウのおすは長い尾をひき，コバルト色の眼飾りが美しいので日本のパラダイスバードとよばれ，ちょうどコップのような巣を枝の三つ叉にクモの糸でからみつける．姿が目にたつので暗いスギ林を好んですむ．

ウグイスのなかまのセンダイムシクイが草かげや崖につくる巣にはツツドリが卵をうむこともある．

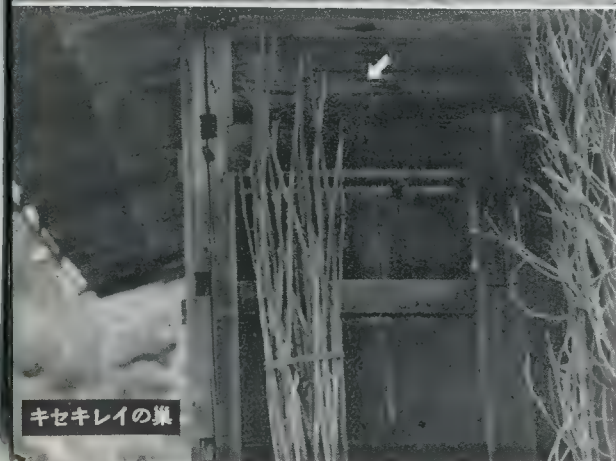
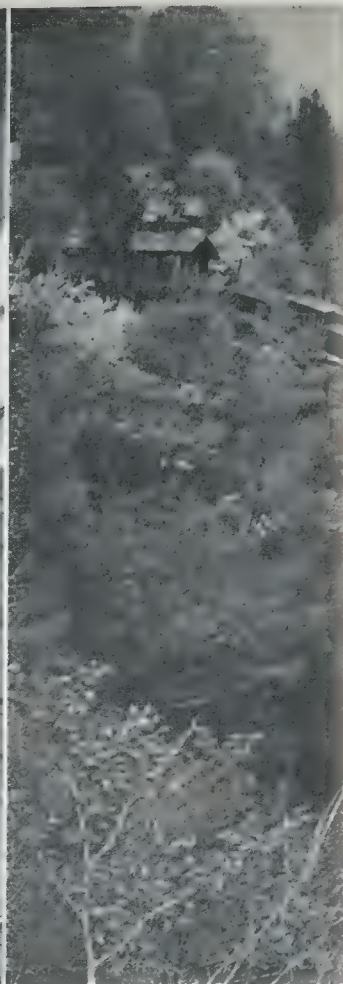
フクロウは夜，羽音をたてずに餌をさがしまわる．

メジロ

オオルリのおす

オオルリのめすと巣

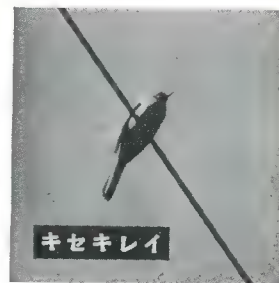
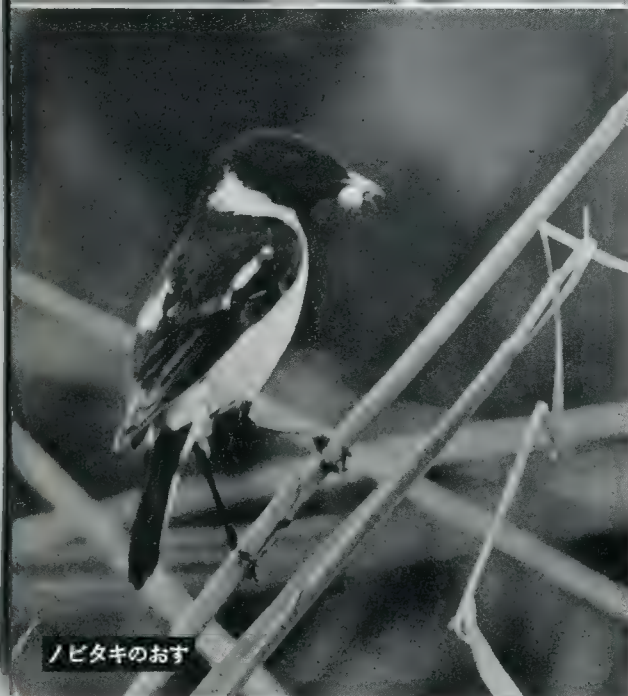
大野川村

キセキレイ

亜高山帯の鳥

この写真にみる大野川村のように、一一〇〇メートルくらいまではまれに村落があるが、亜高山帯（標高一五〇〇―二五〇〇メートル）となると山小屋などを除いて人家はなくなり、渓谷や森林もとみに景観を変えてくる。もはや気候帯でいえば亜寒帯に当たり、雪も六月近くまで消えない。水平分布からみて北海道では数の少ないツバメが、やはりこの地方でもここまで上ると、人家があってもすむことはまれで、そのかわりなかまのイワツバメが高山帯にまですんでいる。この鳥は、北海道では平地にいるので、水平分布と垂直分布の比較が完全に一致しているわけである。人家の石垣や屋根に営巣して繁殖するキセキレイも、盛夏には水棲昆虫を追って、渓流ぞいに山高く上る。

イワツバメ

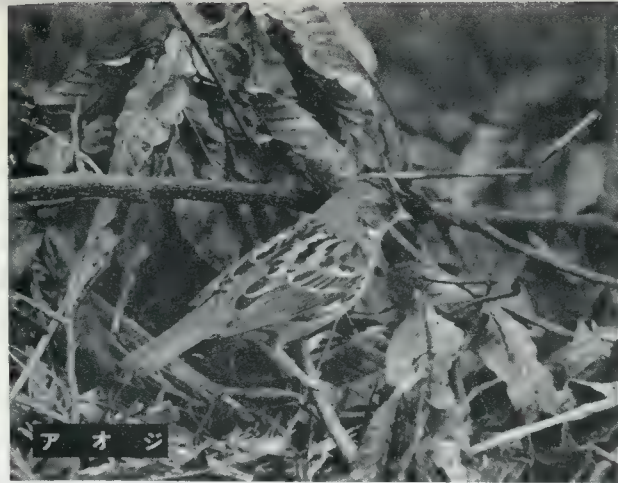
イワツバメ

キセキレイの巣

ノビタキのめす

ノビタキの巣

ビンズイはセキレイに近い鳥, アオジはスズメのなかまで, ともに草原や灌木や喬木の上でさえずるがビンズイは俗にキヒバリともいわれ, 梢から5〜6間まい上ってないてはまたもとの梢にもどる 秋にはどちらも平地へ下ってゆくが, 餌はおもに, 地上の昆虫である.

ツグミのなかまのノビタキも, 同じころ草原の草の穂先や, 灌木, 枯木の頂などで, さえずりだす. やがて, 草かげの地上に外部を枯草のくずや細根でかこみ, 内に獣毛や羽毛をしいた巣をつくり卵をうむ 朱色のヤマドリゼンマイの毛茸をしきつめた巣がみつかったこともある. この写真のメスは卵を抱いている時期なので腹の毛がすりきれているのがおもしろい. オスの方はクモをくわえていて, 食性の一端を示す.

ノビタキのおす

アオジ

ビンズイ

草原　草原や灌木林をこのむノビタキやホホアカも、北海道では平地にいるから、水平分布と垂直分布の合致している例だが、この地方でノビタキと同じ高さにすむアオジを例にとると、北海道では高山帯まで分布していてかならずしも両者は合致しない。この地方では亜高山帯の指標とさえいえるメボソにしても、北海道では稀で、繁殖しないらしいことが、清棲氏によって明らかにされた。このように鳥の分布は気候だけではきまらない。食性、気温、習性などに加えて、その鳥が過去にどうしてその地方にすみついたかという系譜も条件となる。草原も亜高山帯になると天然の草原で灌木もまじり、ノビタキ、アカハラなど地上の餌をとるツグミ類や、草むらに営巣するビンズイたちのすむ環境となり、灌木の頂でさえずる姿もみうけられる。

番　所　原

アカハラの母と子．ツグミのなかまの夏鳥で，明かるい林をこのみ，ほがらかにさえずる声は高原のさわやかな朝を告げる．

カワガラス

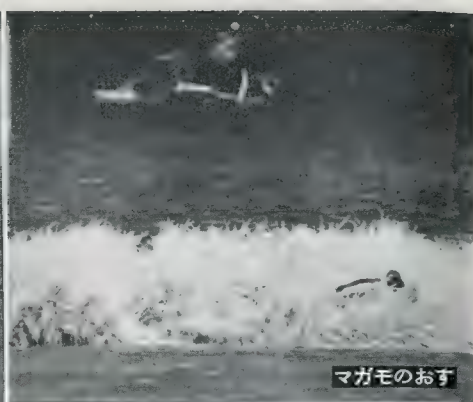
カワガラスのひな

ヤマセミの卵

上高地梓川

渓流　春さきの雪どけ水がどっと渓流にあふれだす頃から、水棲昆虫のトビケラ、カワゲラなどを追うキセキレイが、他の餌が見つからないために、どんどん流れをさかのぼって山深く入りだす。ヤマセミのなかまは、イワナなど数の少ない川魚を餌とするために、なわばりがきまり、つねに一つがいの鳥がある範囲の渓流をひとり占めにし、他のなかまは別の流れをさがして自分の採食場所とする生態がみられる。このような鳥では、やがて生まれたひなも巣立ちすると親とは別の渓流へ分家してゆく。鳥によって、なわばりをつよく主張するものと、そうでないものとがあるが、肉食する猛禽類は餌の量がおのずと限られるので広い地域を専有する。繁殖地の争いもはげしいが、繁殖期以外でも、モズのように越冬地のなわばりを争う例がある。

カワガラスはミソサザイのなかまだが，渓流をおよぎ，もぐりもうまくて水棲の昆虫を食べる．しかし水かきはない．親はチョコレート色だがひなには斑がある．ヤマセミはカワセミの類で，泥にほったトンネルがその巣．

マガモのひな

マガモのおす

マガモのおす

コガモの卵

こんなにまだ雪のある山山にかこまれた湖で，カモのなかまは繁殖をはじめる．多くの鳥はおすも卵を抱くが，カモはめすだけが抱卵しおすは別のところに群れすんでいる．

明神池の中島では眠つていたおすの群が人の近づいたけはいに警戒し，なきはじめた．コガモは清棲氏の苦心でここに繁殖することが明らかになるまでは，本州のこんな南で繁殖するとは，知られていなかった．その巣はマガモのもコガモのも笹のしげみの中に，笹の葉と自分の胸毛とを使ってつくられる．マガモの方も，清棲氏により，富士山麓の山中湖，奥日光の湯ノ湖附近，八甲田山中などで繁殖していることがすでに明らかにされた．

上高地大正池（コガモの繁殖地）

高山湖　上高地には大正池をはじめ田代池、明神池と合わせて三つの、カラマツやダケカンバにかこまれた美しい湖水が、静かな水をたたえている。気候からいうとほぼ札幌に相当するこの池の周囲の山々に、まだ雪ののこっているうちから、もうカモのなかまは繁殖をはじめる。鳥のひなには、カラスのなかまのように、うぶ毛さえもないまる裸で、なかなか巣立ちしないものもあるが、カモのなかまは、キジやヤマドリやコチドリのひななどと同じように、毛もたくさんあり、活動力もつよくてすぐ歩きはじめる。親鳥はひなをつれてよく水辺を歩きまわるが、そこへ人が近づいたりすると、コチドリのばあいと同様、親鳥は擬傷をおこない、ばたばたと身をもがいて、人の目を自分の方へひきつけ、そのまにひなたちをうまく逃がしてしまう。

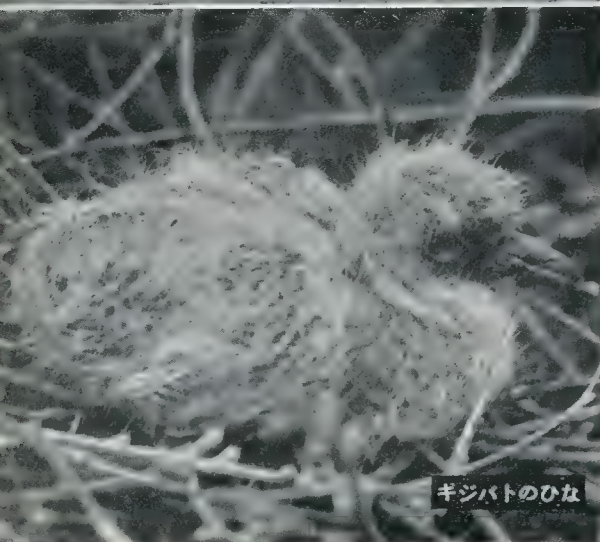
キビタキ

上高地徳沢（闊葉樹林）

闊葉樹林　亜高山帯の森林は、山麓から見るとまっ黒にみえる針葉樹林が主で、俗に「クロフ」とよばれているが、それが雪崩などでたおれた陽地（明かるい場所）には、ソウシカンバやサワグルミなどの闊葉樹林が侵入してゆく。またカラマツなどもまじり、林の中も明かるく灌木や下草も茂りやすい。マミジロ、コルリ、アカハラなどは地上で餌をあさり、密林の下草が多少あるこのような陽地をこのむ。しかしまた、クマザサなどの下草があまり多すぎるとかえっていなくなる。いっぽうキビタキなどは営巣の関係上闊葉樹林をこのむ。陽地はおのずと溪流に面した所が多くその点でも水をたくさんのむ小鳥には極楽である。またニレの巨木などが立ち枯れになった所にはコゲラ、アカゲラ、ゴジュウカラなどが多く営巣する環境ができている。

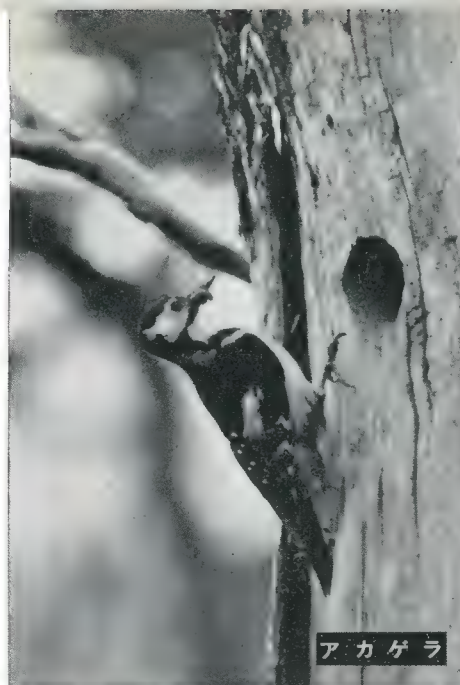
コルリのおす

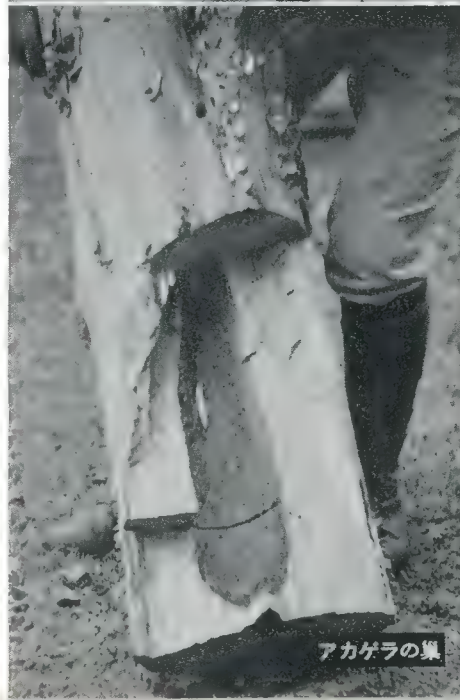
コルリのめす

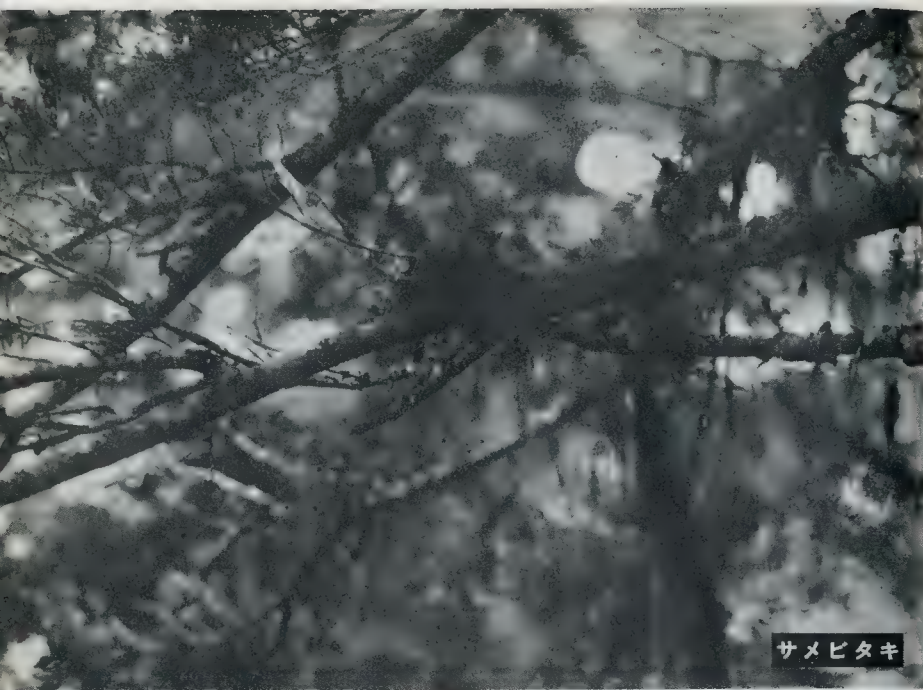
ヤマドリ

キジバトのひな

アカゲラはキツツキのなかまで，留鳥として一年中森林にいる．山麓のものは褐色がちで本來のアカゲラの色だが，亜高山帯のものは白色がちである．こうしたことはフクロウにもみられ，温度と湿度の影響である．やはり枯木に洞をつくり巣とするが，餌をもとめて高山帯の灌木林まで飛びダケカンバの老木などに巣くう虫をとることもある．

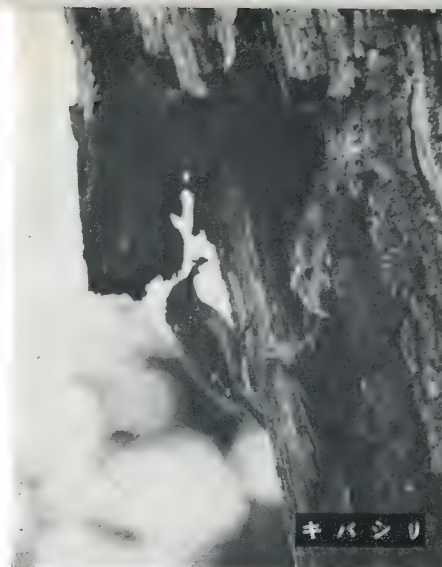
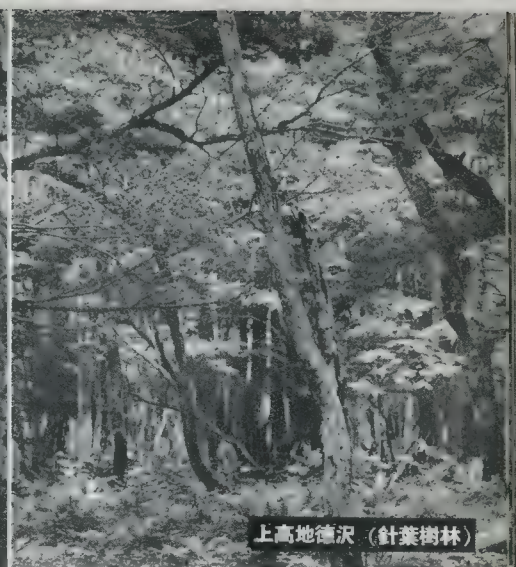
コゲラは，日本産キツツキでは最小のものである．冬，シジュウカラなどと群棲していることが多い．夏，木の幹をうがち，樹洞に産卵するものに多い白い卵をうむ．ゴジュウカラは自分では洞をつくらず，7頁のようにキツツキ類の古巣を利用する．

ヤマドリ，キジバトもこの辺の森にすむが，キジバトはいわゆるヤマバトで，デデポーポーとなく．

アカゲラ

ゴジュウカラ

アカゲラの巣

コゲラ

サメビタキ

サメビタキの卵

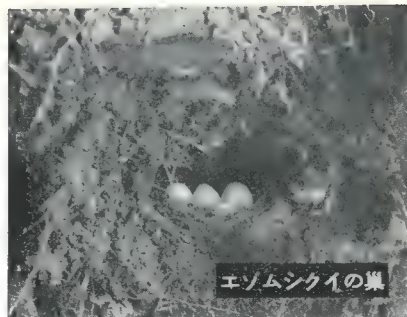
キバシリのひな

キバシリ

上高地徳沢（針葉樹林）

針葉樹林　シラベ、コメツガなどを主とする亜高山帯の針葉樹林の中は、四季を通じて暗く、したがって下草ものびず、クマザサばかりが茂っているが、このあたりに、シラベやカラマツの実をもとめてくる鳥には、カラ類やカケスなどがあり、また姿の美しい鳥で目だたないようにと針葉樹林にひそむのもある。低山帯を代表する鳥の声がキビタキ、オオルリであれば、亜高山帯に入るとルリビタキ、メボソの声が耳に入り標高一五〇〇メートルを越えた指標となる。針葉樹林にすむ鳥は大はクマタカから小はキクイタダキまで六〇種に上るが、亜高山帯が上限に近づくと、喬木ものびずにくねくねとして、やがて高山帯のハイマツもまじりだす。この辺には、シラベ、ハイマツの毬果をついばみ、常には亜高山帯にすむホシガラスの姿もみえる。

メボソの巣

メボソの巣

ジュウイチのひな

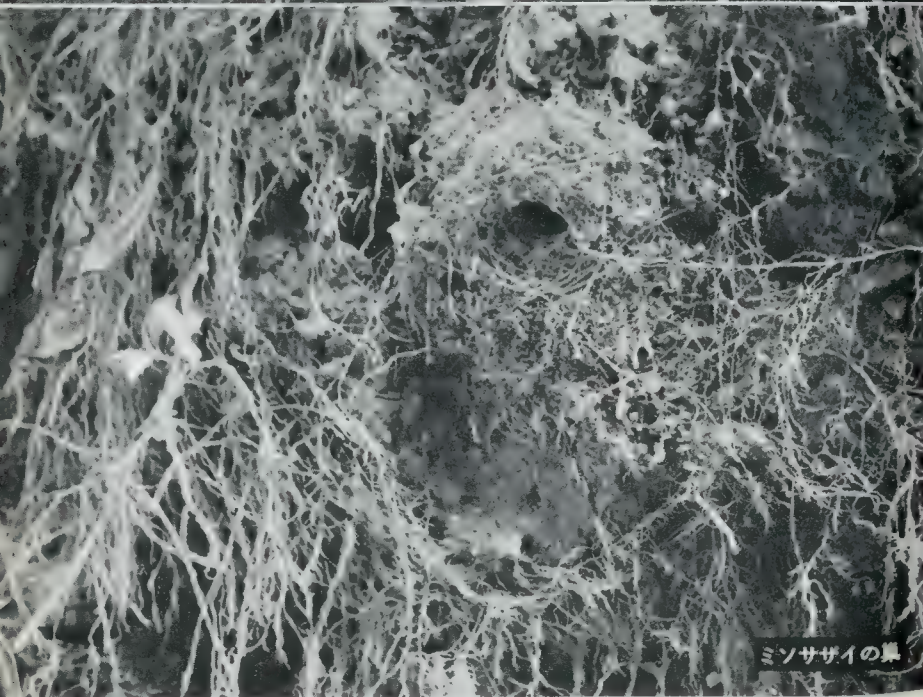
エゾムシクイのひな

エゾムシクイの巣

エゾムシクイも，センダイムシクイと同様(27頁)にウグイスのなかま．春きて8月ごろにはもう南へ去ってゆく．初夏のころ亞高山帯の崖地や針葉樹の根もとの洞に巣をつくり，附近の林に生活する．この巣も清棲氏がはじめて発見したもの．コケの類を主な材料として造られている．

ホトトギスや，カッコウのなかまのジュウイチも，濶葉樹林に多い．コルリの巣に卵を託すので，コルリのいない低地ではみられない．これはコルリの巣にそだち，仮親のうんだ卵やひなを追いだしその巣をひとりじめしてそだったひなである．鳥が卵を抱き，ひなをそだてるときは，人間のばあいのように自覚をもってするのとちがって，本能的に自分の巣にある卵やひなだけをそだてるので，たとえ自分の卵でも，いちど巣から出されると，とんと見むきもしない．そのかわり巣にあるものは，自分の子と似ても似つかぬ他の鳥の子でも，気にもしないでそだてあげる．だからジュウイチも卵をうまくうみつければもうしめたものである．

上高地徳沢（エゾムシクイの繁殖地）

エゾムシクイ

ウソの巣

ミソサザイの巣

ウ　　ソ

夏のはじめヤナギの梢に群れて新芽をついばむウソはコメツガやシラベの林にお椀型の巣をかける.

ワシに次いで大きく深山に常棲するクマタカの巣は清棲氏の発見したものであるが，これは小鳥には手をださぬので折から二羽のヒガラが留守をねらって自分の巣材にする獣毛をぬすみだしていた.

逆に日本ていちばん小さいキクイタダキは針葉樹の枝の先に，クモの糸をつかってハンモック様の釣巣をかける．これも清棲氏の初発見によるもの.

ミソサザイは，初夏には1000mくらいの高さで繁殖し，盛夏には高山帯近く上って卵をうむ．岩かげや滝のかげにコケでふかい横口の巣をつくる.

ツグミ類のルリビタキは樹根などの洞に営巣する.

クマタカの巣

キクイタダキの巣

ルリビタキの巣

立山稱名滝

高山帯の鳥

高山帯（標高二五〇〇メートル以上）に入ると、もはや森林はみられず、二、三の喬木がまがりくねって立っているばかりで、ここから上はハイマツ、ミヤマハンノキなどを主としたいわゆる高山植物の世界になる。ハイマツのおおいのこした山肌には岩石ばかり露出したり、地衣とわずかな草木だけしかみられなかったりする場所も多く、気候からいえば寒帯に相当する。水平分布でも、緯度の高い国へゆくにしたがって棲息する鳥の種類がへってゆくのと同様に、春夏といえども、山麓では大小七〇種をかぞえる鳥のなかまが、二九〇〇メートルをこえるとわずか一〇種にへりさらに三一〇〇メートルに及ぶとたった五種になる。しかし種類はへっても、メボソ、ルリビタキの数が増して盛んにさえずる。

イヌワシの巣

イヌワシのひな

イヌワシの巣

イヌワシ

周年2300ｍ以上の高山の岩地にすむイヌワシはその巣が2ｍ以上もあって，高い崖に，木の枝をあつめてつくっているので，めったに見た人はないが，日本では清棲氏が鳥々谷で初めて発見し次いで木曾谷でも発見した．

ザイルにぶら下って苦心撮影したこの巣には，卵のある傍に食べのこしのウサギの足やヤマドリの羽が捨ててある．同じ巣の上に，一年おきくらいに巣材をつみかさねるので，いわば年輪を数えるようにしてその巣の大体の年数が知られる．このひなは木曾谷の巣で撮られたもの．前にある卵は無精卵でかえらなかったものだ．その年巣立った若いイヌワシは羽の下に白いまだらがあるので飛んでいるところを下から見てもすぐそれとわかる．

イワヒバリ

イワヒバリの卵

焼岳の絶壁上を舞うアマツバメはいかにも高山鳥らしい姿ではないか．ふだんは2300mから3100mくらいの高山の岩壁のさけ目に営巣，棲息していながら強い飛翔力で安曇野まで飛び下って餌をあさる．その軽快な姿は北アルプスいたる所の山頂に見られる．巣は枯草を唾液でかためてつくる．

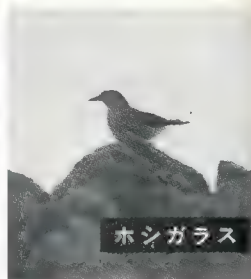
ハリオアマツバメも同じ高山の鳥だが，アマツバメより大きく，尾が短くて先端に針のような羽軸がつきだしている．巣は樹洞につくることが多い．

イワヒバリは夏は2200mから3100mくらいの高山にだけすみ岩石のすきまにコケで巣をかける．内には，ごみすて場でひろった人の毛髪などもしく．10月，高山に餌がなくなるとどこかへ飛び去る．

アマツバメ

ハリオアマツバメ

ホシガラス

ライチョウのめす

ホシガラス

高山帯の岩石の上は‘ホシガラスの食堂’とよばれ，食べのこしのハイマツの実などが，うずたかく積まれていることがある．この鳥はこうして一定の場所で採食する習性がある．写真では冷泉小屋のごみすて場でひろったウサギの足を食べているが，こうして動物食もする．その名は体の星のような斑点からきている．

カヤクグリはイワヒバリのなかまで夏鳥だが，高山の渡り鳥の中では，春早く来て秋おそくまで滞在する鳥であり，灌木や小さい樹の枝にコケ類を使って巣をかけ繁殖する．

ライチョウの卵

燕　岳

日本アルプスの高山鳥といえば、すぐ引きあいにだされるのはライチョウであろう。その名は古い時代から和歌などにもよまれて、珍鳥とされていた。遠く氷河期に、まだ本州が大陸と続いていたころ本邦にすみつき、氷河の去ったあと、高山帯の雪のある所にのこった鳥とみられる。羽の色が夏と冬でいちじるしく変わることも、低気圧にたえるようにできている體の構造も高山帯に適している。警戒心がきわめてつよく、よく晴れた日に高山帯に飛来するクマタカやイヌワシをおそれて夏冬とも朝夕だけしか餌をひろいに出ないし、人がカメラでももって近づこうものならめすはあわただしくひなをかくして、シーシーという声もけたたましく体当りして襲ってくる。巣はけわしい崖にあるので、この鳥の巣や卵は、滅多に撮ることができない。

カヤクグリの巣

カヤクグリ

天狗平より劔岳を見る.

冬の山

高山

ハイマツの樹海もシラベの梢も、深い雪にとざされて、しだいに白銀の世界になると鳥の姿もへって、ライチョウだけが風雪をしのいで岩石の間にかくれ長い冬をこす。十一月はじめから彼らの褐色の夏羽がしだいに純白の冬羽に変わり。おすのまっ赤に立っていた肉冠も色を変える。吹雪と寒さにさまたげられながらも、わずかに山上の平穏なときをみはからって、高山帯と亜高山帯の中間まで飛び下り、雪のあいだにやっと頭だけだしているダケカンバやミヤマハンノキの花穂をついばむその姿はいかにも健気である。亜高山帯上部の二三〇〇メートルくらいの所には、可憐なコガラがふみ止まっている。この鳥はシジュウカラのなかまの中でももっとも高い所にすむ種類である。カラ類は渡りをしないで、くちばしでコッコツ木の幹をつつき冬のあいだもそこにかくれているハエの卵や、ハナグモ、ガの卵などを探して食べる。しかし冬ごしするものの数は夏にくらべるとずっとへっており、どうして同じ鳥のなかで留まるものと移るものとがあるのかが、ここでも問題となる。おそらく冬のあいだはとぼしい餌をめぐってなわばり争いがあり、それに敗れたものが移動し、また、中には暖かな避寒地をよく知っていて積極的にそこに移るものもあるのだろう。いっぽう冬のさなかに渡りの途中たおれた不幸な小鳥のなきがらが翌年雪のとけた下から発見されることもあり、海洋に生活するのがふつうのカモメ類などが、低気圧のうずにまかれてきて山地でひろわれることもあって鳥界の悲劇をものがたる。

乗 鞍 岳

冬のライチョウ

コ ガ ラ

春のライチョウ

ハギマシコのとびたった跡

ヤマドリの足跡

キジのとびたった跡

カシラダカ

カシラダカは，冬近くなると大群で灌木林や雑木林に渡ってくる．畑などに群棲する姿もみられる．5月，渡り去るころには黒みがちの夏羽にかわる．

マシコの類も冬だけ渡ってくる鳥で，ベニマシコ，ハギマシコ，オオマシコなどがあり，山麓の植物の種子を食べながら寒い冬を越し，やがて春あさいうちに渡り去ってゆく．

キジ，ヤマドリの大敵でウサギなども食べるオオタカは，夏は2600m前後の高山から山麓にかけてすむ．冬は山を下って山麓のアカマツ林などにすみ，餌をもとめて帆翔する姿が見られる．ワシの類では，本州に繁殖しないオオワシが千島あたりから渡ってきて，山麓に珍しい姿を現わし，キジ，ヤマドリなどをおそれさせるのも冬の間のことだ．

スズラン小屋より乗鞍岳を見る

高原

山頂から麓へしだいに白銀の世界がひろがってくると、秋の末まで入れ違いに群をなして往来する夏鳥と冬鳥の渡りでいそがしかった草原もさびしくなり、静かな朝の晴れ間、新雪の上にウサギやリスのそれにまじってキジやヤマドリなどの何か異様な感じのする足あとが見いだされる。ヤマドリは冬鳥のレンジャクのなかまと同じく、クリやナラの林に多いヤドリギの実やシダ類などをついばむが、キジは農耕地のひらけたあたりにすんで穀物をとり、大雪のときには人家の納屋などもねらってくる。鳥たちは、繁殖がすむとすぐ巣をすててしまい、シジュウカラやキツツキの類が樹洞の巣にのこっているほかはいっさい巣をもたないが、ねぐらとするところだけは、いつもきまっている。

ベニマシコ

オオタカ

会染村高瀬川

水辺

積雪にうずもれる高山の頂近い湖は別として上高地の池にはマガモ、コガモが大部分結氷する水辺にすんで冬をこす。夜は安曇野に餌をとりにゆき晝はわずかでも水の流れている辺りにすむのが彼らの冬ごしの生態である。雪の間の渓流にはセグロセキレイ、ミソサザイの姿がみられ平地の水辺にはアオサギ、ゴイサギ、カイツブリなどの留鳥、アオシギ、イカルチドリ、タゲリ、ケリ、クイナなどの冬鳥がすむ。木崎湖、青木湖にはマガモ、コガモが上高地に繁殖するものとは別に北国から渡ってくるし、ハジロガモのなかまも多いが、結氷する真冬にはいなくなる。マガンは渡りがあるだけですみつくものはなく、カルガモは安曇野では冬に多く富山側のように夏繁殖するものは少ない。

マガン

カルガモ

タ　ゲ　リ

キンクロハジロ

カイツブリ

ミ　サ　ゴ

ホシハジロ，キンクロハジロなど，ハジロガモのなかまは，冬が近づくと群をなして，木崎湖，青木湖，諏訪湖などにやってくる．他のカモ類とちがい，飛び上る前にしばらく水上を滑走する．もぐるのが得意で，空気をたくさん吸いこんでおいて，ながくもぐっている．

タゲリもチドリのなかま．冬鳥であるが，飛ぶ時にネコのような声でなく習性があり，水田で，水棲の昆虫などを食べている．

ミサゴは，魚とりがうまくて，腹が白く翼は長い．

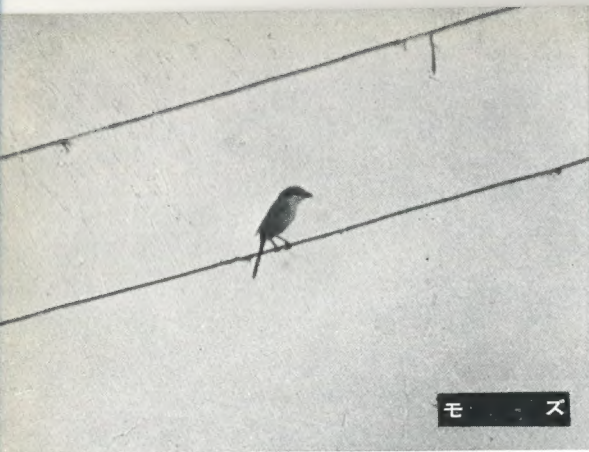
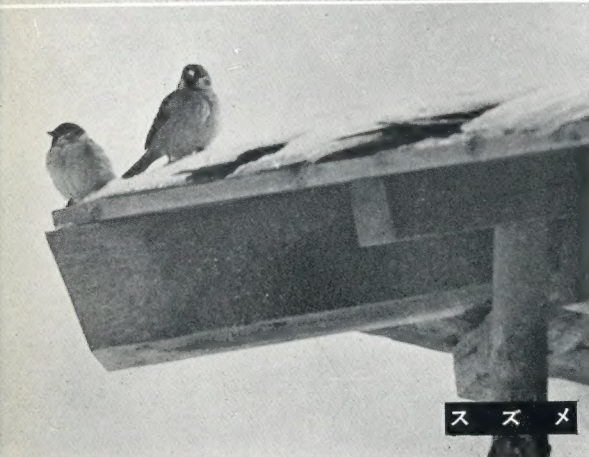
留鳥で，一年中水上生活をしているカイツブリは水草をあつめて水上に浮巣をつくり，流されぬように，あたりの水草につないでおく．巣をはなれるときには，上手に水草をかぶせてかくしておく．危険がせまると，もぐる．

オナガカモとマガモ

ホシハジロ

モ　ズ

ミソサザイ

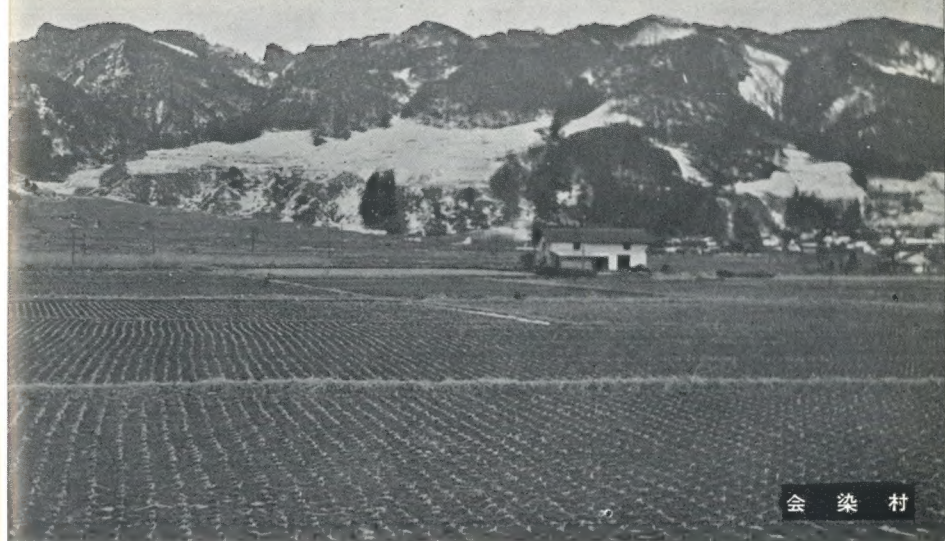
スズメ

冬，山麓へ下る鳥の中にはミソッチョと愛称されるミソサザイの姿もある．

モズも秋口に山麓へ下り高い梢でさえずる．これは冬の間のなわばりを争うためで，これら肉食の鳥は昆虫などの少ない冬がくる前にはげしく争う．

スズメは山麓でふつうみる留鳥だが 1000 m 以下に多い．1200 m の番所原には数少なく1500mの上高地にはもうみられない．しかし中国では村落が高原にあるところでは1700mまですんでいる例があり，必ずしも高い所にすまないとはいえぬ．

ヒヨドリもミソサザイ同様，冬は山を下る漂鳥でこの地方には，数も多い．

ツグミは，数千羽が一群となって渡ってくる冬鳥の代表的なもので，カスミ網のよき獲物であった．

ムクドリ

会染村

村落

安曇野まで山を下るとそこにみられる鳥の姿は、冬鳥のふえるのと寒さを逃れて山を下ってくる漂鳥がまじるのとで、夏にくらべても種類はへらないが、しかしなお標高六〇〇メートルもあるこの辺では、東京の近くで多みられるウグイスやアオジの姿はなくメジロも遠く南へ去る。また平地でも鳥の餌となるものは動植物ともにとぼしくなり、鳥たちの活動する範囲もおのずとかぎられる。しかし渡りの途中に立ちよるものは別として、ここにすみつく鳥たちはねぐらも採食地もほぼ一定しているので、そのような場所にはかえって多は群をなした彼らの姿が数多く見うけられる。こうしてとぼしい餌をもとめて命を守りながら冬をこす鳥たちにも、やがて春はしのびやかにめぐってくる。

ツグミ

ヒヨドリ

科	鳥名
カラス科	ハシブトガラス、ホシガラス、カケス
ムクドリ科	ムクドリ
スズメ科	スズメ、ウソ、アヲジ、ホホジロ
ヒバリ科	ヒバリ
セキレイ科	ビンズイ、セグロセキレイ、キセキレイ
キバシリ科	キバシリ
ゴジュウガラ科	ゴジュウガラ
シジュウガラ科	シジュウガラ、キクイタダキ
モズ科	モズ
ヒヨドリ科	ヒヨドリ
サンショウクイ科	サンショウクイ
ヒタキ科	コサメビタキ、サメビタキ、オオルリ
ウグイス科	エゾムシクイ、メボソムシクイ、ウグイス、オオヨシキリ
ムクドリ科	トラツグミ、マミジロ、クロツグミ、ノビタキ、ルリビタキ、コマドリ
イワヒバリ科	イワヒバリ
メジロ科	メジロ

槍ヵ岳 3179m
大喰岳 3100m
南岳 3033m
北穂高岳 3100m
涸沢岳 3103m
奥穂高岳 3170m
前穂高岳 3090m
上高地

夏（黒線）
冬（白線）

3500m 3000 2500 2000 1500 1000 500 0

高山帯
亞高山帯針葉樹林
落葉樹林
山麓

蝶ヵ岳より見た槍ヵ岳と槍沢

夏のライチョウ

山の鳥 31

¥ 100